

# 市場から世界をみれば

IS6 情報システム株式会社 大谷淳一



カ国で世界の大豆生産高の81%を占めている。

また輸出に対しては同様の数字を示しており、アメリカ2790万トン、ブラジル2770万トン、アルゼンチン150万トンとなっており、07年の大豆の世界総輸出量が7470万トンなので、この3カ国で90%を占めることになる。

遺伝子組み換え大豆（GM大豆）は、96年からアメリカで栽培されるようになった。その後アルゼンチンにも移入され、やがて各国で栽培が進んだ。07年のGM大豆の栽培面積の比率は、アメリカ91%、アルゼンチンで95%以上であり、ブラジルでも60%以上となっている。とうとうGM大豆は、世界の大豆生産量の6割を占めるようになったのである。モンサント

トは当初、GM大豆の種子を、無料または非GM大豆より安い価格で農業従事者に提供した。その効果もあってGM大豆は瞬く間に普及し、アルゼンチンでは大豆栽培が国の基幹産業となっていた。その点ではモンサント社の思惑は的中したのであった。

低下する収益を改善するため、モンサントは次輸入手段をとった。「延長権を行使した。アルゼンチン産大豆の加工品に保存した種子に対し、特許侵害訴訟を起したのだ。」

豆の栽培を国として認めないが、実際には不正にアルゼンチンなどからGM大豆の種子が持ち込まれて栽培されていた。これを見かねたアメリカ政府とモンサントがブラジル政府に圧力をかけた形で、03年、ようやくGM大豆の栽培をブラジルが認可した。そして正式にGM大豆種子販売を開始したところはロイヤリティーは順調に支払われていたが、アルゼンチンと同じく、次第に支払いが滞っていったのであった。

## 第13回「GM(遺伝子組み換え)種子戦争」④

だが、アルゼンチンではモンサントの「種子特許」という主張が認められなかった。アルゼンチン

これは明らかにアルゼンチンの法律に違反して行なっていた。ブラジルは、植物新品種保護

「CipicジャーナルVol1188 09年2月遺伝子組み換えされた大豆に関する南米での紛争」

ンの法律は、一度ロイヤリティーを支払った種子を植え、それから得た種子を保存して再度植え付けた場合には、もう一度ロイヤリティーを支払う義務はないと判断したのだ。モンサントは苦境に立たされることになる。

その後、両者の関係は改善されないまま、深刻な対立に発展していった。そして、この紛争はヨーロッパに飛び火したのであった。モンサントは解決しないアルゼンチンとの紛争に手を焼き、

者向けのコンサルティング、セミナー、業務改革、講演を各地で行っている。主な執筆として「青果卸の業務改善2」「食糧操作」などがある。

世界の大豆の生産高は2億1980万トン（07年）で、そのうちアメリカ、ブラジル、アルゼンチンの3カ国が80%を占めている。97年から07年までの大豆生産高は、アメリカは7040万トンとそれほど変化がないが、ブラジルは3250万トンから6100万トン、アルゼンチンが1950万トンから4700万トンと増加している。07年の時点ではこの3

当初かなりの額を得ていたが、GM大豆の栽培が拡大するに従い、受け取れるはずの金額が徐々に減少していったのである。

刻な対立に発展していった。そして、この紛争はヨーロッパに飛び火したのであった。モンサントは解決しないアルゼンチンとの紛争に手を焼き、

品製造会社、仲卸売業

【略歴】1957年北海道美唄市生まれ。85年、食品管理、生鮮管理のシステムを開発する情報システムを創業。荷受卸売業者や食品製造会社、仲卸売業

品製造会社、仲卸売業